

ジョナサン・グレイザー『関心領域』(2023 アメリカ・イギリス・ポーランド作品)

ジョナサン・グレイザー(1965~)は、ロンドン出身、『アンダー・ザ・スキン』(2013)『記憶の棘』(2004)という作品をこれまで発表し、特に前者は賛否両論を起こすが、イギリスの「ガーディアン」とパリの「カイエ・デュ・シネマ」での評価が高かったということで、機会があればぜひ見てみたい作品です。

アウシュヴィッツを描いた作品です。それもアウシュヴィッツを管理・監督していたナチスの側からの視点で描いたものです。ルドルフ・ヘスというこの収容所の所長は、この収容所から壁一つ隔てた場所に理想的な住居を整備し、理想的な家族生活を送ります。特にヘス夫人のこの住居に対しての思い入れは大変深いものです。一方、収容所でのユダヤ人殺害後の死体の処理について、いかにすれば死体を能率的に焼却できるか様々な研究・検討も行われ、シーメンスあたりが提案をするといったシーンも出てきます。理想の住宅には理想の苦勞して作られた理想の庭があり、そこで美しく咲きそろう花々が映し出されますが、これは三島有紀子の『一月の声に歓びを刻め』(2024)の3話目に出てくる重要な役割を果たす花同様、花の美しさを超えた残酷な現実を象徴したものとして登場するのです。

一体どういう神経だったのか。この生活環境の中で、このドイツ人一家の怖さが十分に描かれます。しかも、実に淡々とヘス所長というナチスの将校一家の生活を描いているのでなおさら怖さを感じるのです。単に戦時の敵愾心だけのものではなく、アーリア系人種至上主義に基づく恐ろしい排斥の根強さたるや改めて思い知らされます。ユダヤ人問題を描いた作品はこれまで数多発表されましたが、筆者が昨年見ることのできたジャン＝ピエール・メルヴィルの『海の沈黙』(1949)も多大の問題点を指摘する作品でしたが、本作もまたこのジャンルの作品の中で強烈な印象を残すものとなりました。

先の対戦から80年という長い年月が経ち、今なおその風化を危惧する声が改めて高まる中、その罪深さに対する鎮魂はどこまで為されたのか、また1945年体制の続く根拠の正当性、歴史は繰り返すという言葉の持つ重みを考えさせられます。黒澤明が長崎の原爆を題材にした『八月の狂詩曲』(1991)を発表したときに行われた外国人記者との質疑応答で、外国人記者から「広島と長崎への原爆投下は真珠湾と南京大虐殺が原因であり、その結果として起こったこと。それなのに原因を描かず、結果だけを映画にしたのは何故か？」と問われ十分な回答ができなかったことがありますが、このように外国人のフラストレーションも高いヴォルテージを維持したままにしているということからすれば、今でも極めてセンシティブなものなのです。80年という年月を経た後、これからどう展開していくのでしょうか、この問題は。

リュ・スンワン『密輸1970』(2023)(英題『SMUGGLER』)韓国映画

韓国国内の数々の映画賞を獲得した作品であり、韓国の音楽事情に疎い筆者は詳しい情報を持ち合わせていないのですが、70年台のヒット曲(らしい)を随所に散りばめた実にノリの良い大娯楽巨編といった趣の作品で、一般受けする要素の詰まった作品です。

リュ・スンワン(1973~)は、パク・チャヌク(1963~)に影響を受けた映画監督とされますが、所謂KOREA386世代の次の世代の人物です。(386とは90年代に30代で、80年代の民主化運動に関わった60年代生まれの人々を指します)2000年にインディペンデント系で監督デビューを果たした後、『ベルリンファイル』(2013)『ベテラン』(2015)といったアクションものを得意とするようで、本作でも実に手際よくアクションシーンを取り入れ、観客の興味と視線を逸らすことなくストーリーを展開する力量を発揮します。そこには、(海人の女性たちの)友情があり、反権力思想があり、不正を許さぬ正義感、行動の源泉となる怨念が詰まっています。しかし、そうした重要な要素が何の破綻もなく表現され、事件の結末に爽快感と満足感、つまりカタルシスを覚えることは、129分間の幸福感だけを覚えるだけの行為であり、後に残るものは希薄な思い出だけではないかと感じてしまいます。それは果たしてエンタテインメントと呼べるものなのでしょうか。確たることは、リュ・スンワンの戦術は有効に機能したということです。先に書いた韓国国内での受賞歴に加え、2024年のキネマ旬報外国映画で12位にランクされた実績があります。また、何といても39.6百万ドル(約56億円)の興行収入を獲得した裏付けがあります。

芸術性だけが低い作品、自己主張のみの作品といった興行性を無視した作品があることは事実ですし、興行性を求めるあまり映画の持つ総合芸術性のアンバランスな作品があることも事実です。極めて主観性を基本とした映画を見るという行為ですので、「いい映画」というものが何であるのかは永遠のテーマといえます。そもそも「いい映画」の定義などないのかもしれませんが、そういう風に映画は見るものではないのかもしれませんが。そんなことを考えさせてくれる作品であり、129分の充実した時間を過ごさせてくれる作品でもありました。